

成合遺跡の調査



成合の集落と遺跡が広がる背後の丘陵（平成 23 年夏）

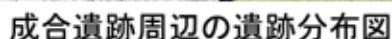
平成 24 年 4 月 21 日

 公益財団法人 大阪府文化財センター

この調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業（新名神高速道路高槻インターチェンジ建設工事）に伴うもので、西日本高速道路株式会社関西支社の委託を受けた公益財団法人大阪府文化財センターが、平成23年7月から本格的な発掘調査を実施しております。

同じ高槻市内の近隣丘陵上には、銅鐸が出土した天神山遺跡や、我が国でも最大級の環濠をもつ古曽部・芝谷遺跡など、同時代の遺跡が分布していることから、この成合遺跡もそれらと同様に丘陵上に築かれた集落遺跡ではないかと考えられてきました。高槻市内の弥生時代の遺跡については、低地部に広がる安満遺跡の集落拡大に伴って、次第に北方の丘陵上に村々が移動していったとされており、成合遺跡もその移動先の村の1つではないかと、研究者の間では以前から注目されておりました。今回の調査で、ようやく遺跡の様子が明らかとなってきましたので、ここで皆様にその成果を見学していただきたく、遺跡を公開することといたしました。

弥生時代の主な遺構には、竪穴建物や、その周辺に形が不揃いな穴などがあります。竪穴建物はこれまでに8棟が見つかっており、今回はそのうちの6棟（竪穴2・3・5～8）が見学できます。8棟のうち、今回見学



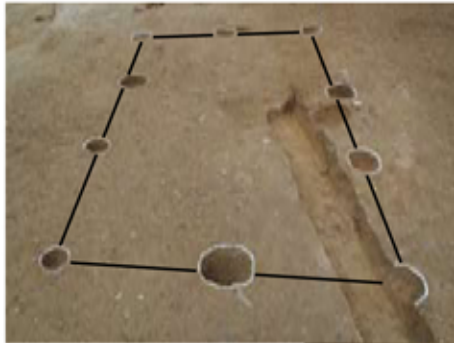
平安時代



濃い茶色の土は平安時代に堆積したもの。この地層の上面では平安時代の遺構が、この下面では弥生時代の遺構が検出できます。



X=124520



柱穴の中からも土器が出土します。



出土した釘は、さびて「かりんとう」みたい！

X=124560

円形や長い楕円形の穴。真っ黒な炭が入っているのに、まわりは焼けていません。炭の中からは釘が出土しました。棺（ひつぎ）に使われていたものかもしれません。



⑥

X=124580



炭の穴の周りから柱穴が4つ見つかるものもあります。穴を覆うような簡単な小屋が建っていたのかもしれない。

X=124580

遺構の見え方



遺構はこんなふうに見えてきます。

中のたまった土を掘ると真っ赤に焼けた壁や底が見えてきます。



壁が赤く焼けた穴の多くからは、土器がまったく出土しません。平安時代の穴がほとんどだと考えていますが、なかには弥生時代の穴も含まれているかもしれません。なかなか区別が難しい！

弥生時代

細長い穴から、弥生時代中期後葉の壺の口の部分が見つかりました。



土器の出土状況をきちんと記録します。

X=124600

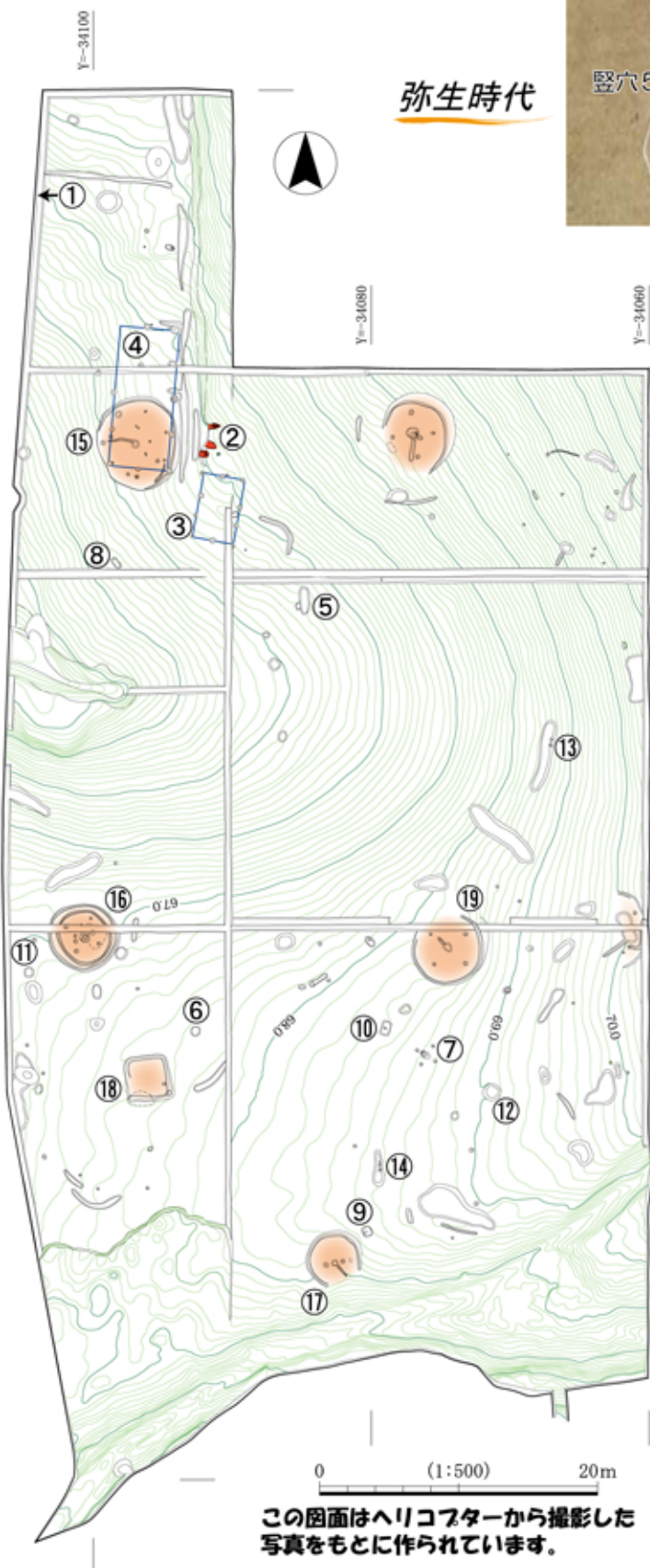
X=124620



①



弥生時代



焼土を取り除くと、炭になった垂木材が見えてきました。それらをすべて取り除くと柱の跡が見えてきます。

四角い竪穴建物

柱穴も炉もありません。人が住むための建物ではなく、倉庫など住居以外の機能があったと考えています。



⑮



⑮



⑮

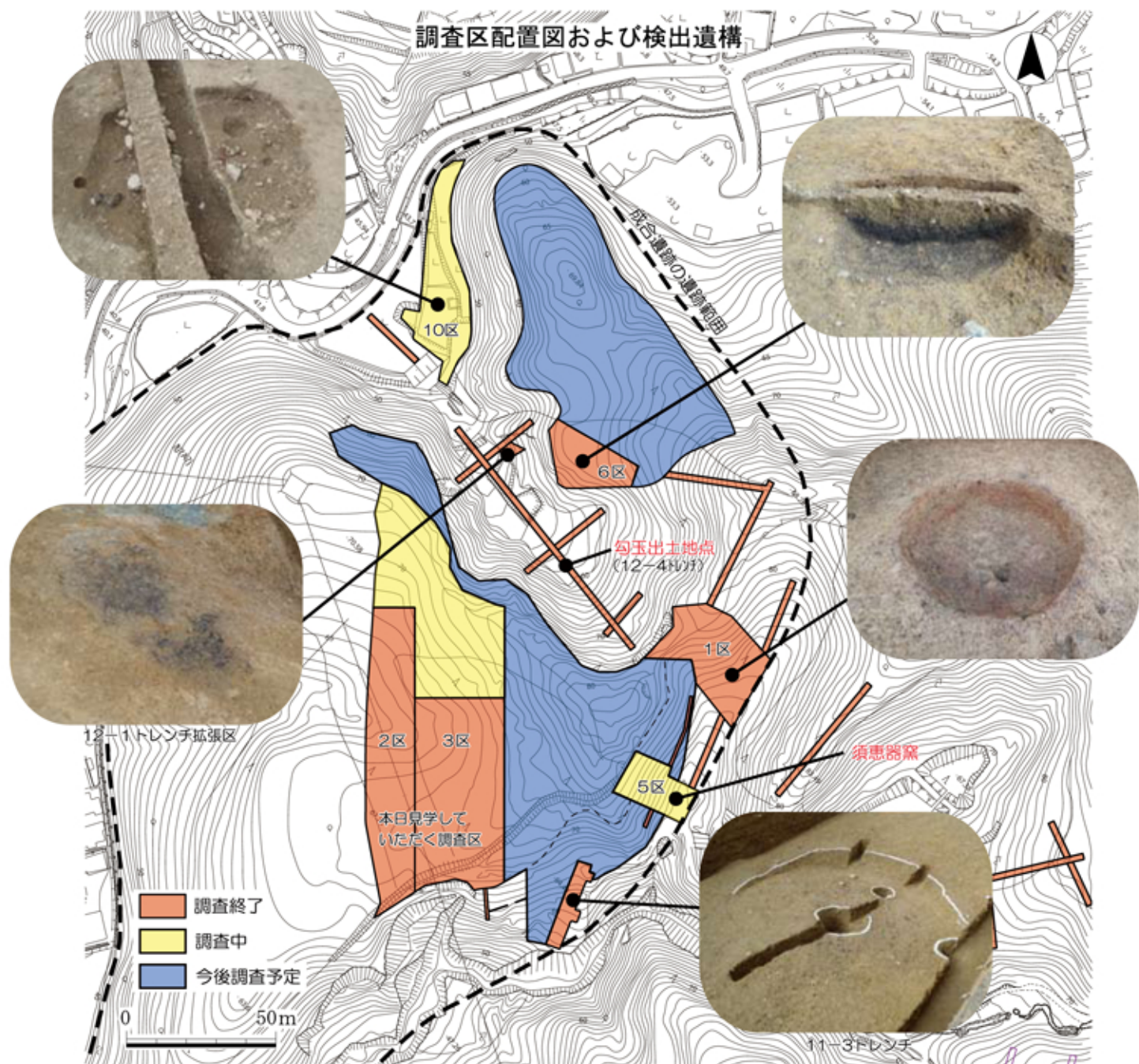


⑮

円形の竪穴建物

中央には炉があり、低い方に向かって排水のための溝が掘られています。住居として使われていたと考えています。

調査区配置図および検出遺構



すでに調査が終了した調査区からも、いくつかの遺構が見つかっています。

できない竪穴1だけが平面形が四角いものでしたが、あとの竪穴建物は平面形がほぼ円形でした。このうちもっとも大型の竪穴3はややゆがんだ南北 6.8m、東西 5.8mの楕円形で、建物の柱も7本であったことがわかりました。また建物の内部からは、焼けた多くの炭や真っ赤に変色した焼土が確認されました。それらを丁寧に掘り下げていくと、竪穴建物の屋根の骨組みとして使われていた垂木材がそのまま焼け落ちた状態で並んでいる様子が見えてきました。ただし、それ以上に多くの焼土が見つかっていますので、教科書や博物館の屋外展示などでよく見かける茅葺きの竪穴建物ではなく、屋根の上が土で覆われた住居だったのではないかと考えています。住居内からは小さな土器片は見つかりましたが、完全な形の土器が当時の状態のまま見つかるという状況ではなかったことから、生活している最中に火災にあったものではなく、建物を放棄した後に焼けたものであったことがうかがえます。これらの竪穴建物の配置を見ると、中央の水はけの悪い谷部をはさんで、竪穴2と竪穴3、竪穴5と竪穴6がきれいに4棟並んでいることがわかります。おそらく集落が築かれた当初から計画的に配置されていたと考えられます。

平安時代の遺構としては、穴を掘って柱を据えただけの掘立柱の建物が2棟のほか、壁が真っ赤に焼けた穴や、真っ黒な炭が入った穴が多く見つかっています。前者の穴は底まで真っ赤に焼けているものもあり、土器片が多く出土するものもあることから、オレンジ色で軟質の「土師器」と呼ばれる土器を焼いた穴であった可能性が考えられます。掘立柱建物2棟は、この穴のすぐ近くから見つかっていますので、土器作りなどをした工房跡であったのかもしれませんが。後者の炭の穴の中からは、釘が出土するものがあることから、土器を焼

いたものではなく、火葬をしたときの穴であった可能性を考えています。釘は遺体を納めた棺を留めてあったものだったのではないのでしょうか。なお赤く焼けた穴は、すべてが平安時代のものではなく、中には弥生時代のもも含まれているかもしれません。遺物が出土しないのでどちらの時代のものなのか、なかなか判別することができません。このほか遺跡南東側の斜面からは、「須恵器」と呼ばれる灰色で硬質の土器を焼いた窯の跡も発見されています。出土する須恵器の形から、9世紀前半に操業していたものであったことがわかります。窯の下の方には、窯からかき出された炭が広がっており、その中にはゆがんだり割れたりした須恵器の失敗作が数多く含まれていました。

今回の調査では、予想された弥生時代の遺構のほか、予想もしていなかった遺構も数多く発見されています。これらの成果によって、北摂地域周辺の歴史的環境の解明がさらに進むことが期待されます。今後とも、調査へのご理解とご協力をお願いいたします。

須恵器窯の下方に広がる炭の中からは、たくさんの失敗作が見つっています。



グニャッと
曲がっています！

谷底に設けた試し掘りの調査区から勾玉が見つかりました。遺構はありません。おそらく上にある集落から転げ落ちてきたものなのでしょう。



ここを掘削中に見つかりました。



原寸

主に新潟県糸魚川市周辺で採れるヒスイという石で作られています。近畿地方ではたいへんめずらしい勾玉です。

遺跡内やその周辺では、遺構の有無を確認するため、幅2mの調査区を設定して試し掘りも行なっています。遺構が存在することが明らかになれば、周辺も広げて本格的な調査となります。



成合遺跡上空より



高槻自動車国道近畿自動車道
名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その2
現地説明会資料

成合遺跡の調査

発行：

公益財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105

大阪府堺市南区竹城台

3丁 21-4

TEL 072-299-8791

印刷：株式会社 明新社

発行日：平成24年4月21日